

登録コード	UAC02500	開講年度	2026				
授業題目	哲学思想論研究Ⅱ			担当教員	篠原 成彦		
				副担当			
単位数	2	講義期間	後期	曜日・時限	水曜・5時限		
			授業形態	講義			
信大コンピテンシー	非該当						
(1)授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」			⇔	【授業の達成目標】		
	2 6 UAカリ・総人社・人間文化学, 2 5 UAカリ・総人社・人間文化学						
	【人間文化学】思想、歴史、社会、情報、言語、芸術など多種多様な側面を持つ人間文化に関する深い素養と幅広い理解を基盤として、その文化を継承し、柔軟な感性と創造的な論考により専門領域の問題を客観的・学問的に究明し、独自に理論を構築する能力や仮説を検証する能力を有する。			⇔	言語哲学と形而上学における大学院レベルの立論と批判的検討の能力を身につける。		
	【人間文化学】人間文化に関する文献・資料を収集・調査し分析・考察する人文学の伝統的な手法を身につけるとともに、他の学問分野の解析手法を併せて修得することによって、複雑多様化する現代社会の課題に柔軟な対応ができる応用力を有する。			⇔	言語哲学と形而上学における大学院レベルの分析技術を獲得する。		
	【人間文化学】高度な言語運用能力とコミュニケーション能力を基盤として、多領域のステークホルダーと協働し、現代社会の課題に取り組みながら、独創的かつ多文化共生的な英知の創成と提案を行う力を有する。			⇔	言語哲学と形而上学における大学院レベルの発想力と表現力を獲得する。		
(2)授業の概要	The Stanford Encyclopedia of Philosophy 所収の解説論文を用いて、言語哲学と形而上学における知見を身につけながら、受講者全員で問題を検討します。2 回目以降は、担当者による報告とディスカッションのサイクルを繰り返し、8 回目には前半（言語哲学）の、1 5 回目には後半（形而上学）の重要事項を確認します。						
(3)授業計画	第1回：テキストと参考書に関する解説 第2回：報告：言語哲学の研究を行う際の基礎知識 第3回：第2回の報告内容についてのディスカッション 第4回：報告：言語哲学の基本問題 第5回：第4回の報告内容についてのディスカッション 第6回：報告：言語哲学における近年の動向 第7回：第6回の報告内容についてのディスカッション 第8回：第2～7回における重要事項の確認 第9回：報告：形而上学の研究を行う際の基礎知識 第10回：第9回の報告内容についてのディスカッション 第11回：報告：形而上学の基本問題 第12回：第11回の報告内容についてのディスカッション 第13回：報告：形而上学における近年の動向 第14回：第13回の報告内容についてのディスカッション 第15回：第9回～14回における重要事項の確認 期末試験は行わない（レポートを課す）						
(4)成績評価の方法	発表50%、期末レポート50%で評価します。 得点率による評価基準 90%以上 秀、89～80% 優、79-70% 良、69-60% 可、59%以下 不可。						
(5)成績評価の基準	報告および期末レポートの内容が、言語哲学と形而上学の知識と技能、および立論と批判的検討において、全般に際立って高度であれば「卓越している」、全般に的確でありかつ深い理解や注目すべき論点を含むものであれば「かなり上にある」、全般に的確であれば「やや上にある」、大きな不備や誤りの無いものであれば「目標の水準にある」と判断します						
(6)事前事後学習の内容	報告担当者には報告資料の準備が必要です。他の参加者も、毎回、テキストをじゅうぶんに読み込んで授業に臨んでください。また、8 回目と15回目には授業内容を振り返っての考察を行いますので、それに対応できるだけの復習が必要となります。						
(7)履修上の注意	やむをえず欠席する場合は、テキストと参考書を用いて、自分で理解を補っておかねばなりません。						
(8)質問,相談への対応	オフィスアワーの利用が可能です。メール連絡は、nshinoi@shinshu-u.ac.jp まで						
【教科書】	The Stanford Encyclopedia of Philosophy, Center for the Study of Language and Information, Stanford University						
【参考書】	飯田隆（編）『哲学の歴史〈第11巻〉論理・数学・言語 20世紀Ⅱ』（中央公論新社 2007年） 柏端達也著『現代形而上学入門』（勁草書房 2017年）						